

明日の出来事を考えると憂鬱だ。

仕事にも行かないといけない、家族にもサービスをしなければいけない、それらが出来なければ落ちこぼれ扱いされる、だからちよつとは楽にさせてもらってもいいのではないかと思つてしまう。

現実とは非情で非常に辛い。

だから、異世界へと行きたい願望を持つ。

それはとても甘美な欲望だ。

異世界へと行き、仕事も家族もいらぬ。

そんな生活が出来るとしたら私はどうするか。

決まっている。

私の心に阻害された想いを果たす。

ただのそれだけだ。

でも、夜空を眺めても、扉は開かれず、忘れられていく。

だから、いつか叶うとした夢を想い、笑おう。

何故か、そんな想いだけは沸々と湧いた。

「しかしまあ、私という者は伝説でありますが故に一般的詩人なんてね」

あらまあ、と隣の友人君は微笑む。いや、ツツコミどころ一杯あんねんけど。

「これからの時代。やはりナノテクとオソロテクを使わないといけませんね。必ず、実現させます」

あらまあ、と隣の某友人は微笑む。ちよつとは気を遣ってくれませんかね。

「孫子様は言いました。彼を知り己を知らば、百戦して危うからず、と。つまりはそういうことなのだよ、某友人君」

「ああ、気付いたのね。貴女もこれからの人生に八百万の神の力を使うということを」

「……」

「どうしたの？」

「いや、どちらが意味不明でツツコミどころがあることを言ったかなあつて思いました」

あらまあ、と隣の以下略。

空は晴れ間為りて明るい。微かに浮かんで見える月が蒼く見えた。空の下には私と友達が商店街を歩いている。陽射しは至るところを突き刺し、汗を滴らせる。通行人は額に汗を浮かべ拭いている。ハンカチがない人はタオルか手を使って拭いていた。

コンクリートは光射され、陽炎が揺らめく。車も商店街の近くまでやってきた。黒も白も赤も青も。どの車もクラクションを鳴らし今日も元気だった。

歩道に吐き出される人々は一店に集中していた。目指す場所は近く、だからこの商店街は活

性化されるのだろう。

「ねえ、今日は何食べる？」

「ええつとね、イタリアン料理を模した料理とかダメ？」

「フランス料理のほうがいいなあ、ワインとかも飲めるし」

一端の会話を聞くとなんとも平和である。そして外国に行きたい欲がなぜか増えた。最も、私が食べられるとは思ってはないのだから意味はないが。

「某友達君よ」

「何某の友人君、どうした」

「お主がこれから向かっているであろう、星屑の異世界はどこにあるんだい？ その世界には私のあるべき姿が在ると知ったのだが」

「君にはそれを伝えぬ事情というものがあると仰ったでしょうに。我には全てがある。それだけで良かった」

「そう、あれは黄昏時の美しい空を見上げた、あの夏の日のことだったのだ——」

「知らん」

「スマン」

「というか、それが今日じゃん」

「あの日から私は思い出に残すものを求め始めたのです。だけど、今でも思う。これからのこ

とを君と一緒に過ごしていくんだねって」

「笑いながら変なこと言うな！」

「私の思い出。それがとても恥ずかしく、でも、美しくもあるその世界はどこかの思い出の中に紛れている。それだけは事実なんだ」

「ちよつと、大丈夫？ 店に着いたよ？」

「いらつしやいましたね。お客様。やはり、いつも通りでございますね」

「あ、店員さん。お久しぶりです。暑いんでちよつと休憩を挟みながら来たんで」

「そうですか。よろしいですよ。大変貴重なお客様なので」

訳のわからぬ会話の末、辿り着いた店を見上げる。商店街の端っこに居座る店がここである。店名が書かれている大きいプレートを見た。

『アラカン・アルプス・そしてこれからも』

という、あまり理解しがたいツツコミ要素がある店である。というか、ずっと通っているけど、いつも思う。なにが「これから」なんだ？ とね。略して「ああ、これからもね」と常連客は言っているが変である。というか誤解も招く略し方で笑うしかない。

その名の通りアジアの雄大な山脈をイメージした店だ。プレート自体もアルプス山脈の写真を使っている。樹々が立ち並んでいて、入り口から樹海か？ と思わされる。店主曰く「実際にアルプスに行って樹を買ったんだ。それが入り口に似合うかな」と言っていたので、想像力

の賜物だろうか、と思わなくもない。

入り口から外国感を出しているこんな店だ。ツボを押されたお客さんは熱狂的なファンでもある。私と某友人もその一部であるのでそう思う。

「お客さん、二人、ご来店です！」

白のカッターシャツにこげ茶のエプロンを着た店員が案内してくれる。相変わらずの店主は仄かに微笑んでいた。

「いらつしやい。記帳お願いね」

「はい」

お隣の某友人君は自分と私の名前をノートに記入している。その間に聞く。

「店長さん。今日は、何のギルドがあるんですか？」

「果たしに来てくれたのかい？」

「いえ、この前の分があるから、納品みたいな形ですけど、いつも言っていますけど」

「ああ、君たちは中々優秀だからねえ。それで？」

「この某友人君が持っていますからね」

「某友人君？」

「これです」

私は某友人君が記入している場所を指さす。如月咲と月夜奏だ。

「ああ、奏君のことね。君たちはよくわからないところがあるから、ちよつと混乱してしまうからね」

微笑みを崩さない店主に笑顔をやつくりと見せる。そして奏がギルド分もちゃんと納品していたらしい。

「はい、今回の報酬はこちらになります」

店員さんが記入されたギルドを見て報酬を与えてくれた。紙袋が複数程度だろうか。

「ありがとうございます。でも、今日はここで休ませてくれませんか？　ちよつとホント、暑い！　と思つたんで」

「店長どうします？　お客さんは他にもいますけど」

「いいよ。この二人は優先権があるからね」

では、こちらに来てください、と案内する店員さんも微笑んでいる。だから、安心できる。ここは、私達の二つ目の家なのだ。

『アラカン・アルプス・そしてこれからも』が出来たとき、奏とは違う人と歩いて見つけた。その人は、当時の私の恋人だった。だけど、私が入ろうとしたら、なぜか、恋人は断った。そのときは、訳アリなんだなあ、つて思つたぐらいで忘れていった。

でも、気になって違う日に一人で行った。相変わらず、大きな木があるなあ、つて思つたぐ

らいで見ていた。店は結構広いぐらいだろうか、思ったことは。

そして、興味津々といった感じで中に入っていた。

「ああ、お客さんかい？」

店の中には一組の夫婦が食事をしていた。店主が持っていた鍋を今でも思い出せる。店員はいないのだろうかと思って眺めていると店主が鍋をくれた。いや、なんでよと思ったが素直に貰った。

「お客さん。この店は初めてかい？」

「初めても何も、いきなり鍋をくれるってなんですか。こういった違ったアプローチをするお食事処ですか？」

「いや、違うんだよね。中世ヨーロッパにギルドがあつたことは知っているかい？」

「中世ヨーロッパ？ 店名とはかけ離れている場所ですね」

「一応意味はあるよ。ヨーロッパから離れているアジアに行く。つまり、違う世界に行けるということを想定してね」

いや、かなり無理ない？ と思ったが熱弁させるわけにもいかないので黙った。

「まあ、つまり中世のヨーロッパにはギルドがあり、そのギルドをクリアした人には報酬を渡しているんだよ」

「……あの、もしかして、アラカンとアルプスの意味って、そのギルドを山登りの苦勞と同じ

って意味で合ってます？」

「おお！　そこに気付いてくれたのかい？　嬉しいなあ！」

そして皿を二つほど渡してくれた。いや、なんでよ。

「気付いた人にはサービスもあるんだが、まあ、お客さん。一献どうかい？」

「私で良ければいいんですけど」

店主と話したことを恋人に話した。別れた。でもまあ、今は新しい恋人がいるから良いんだけだね。

「さて、咲さんと奏くん」

店員が店主の微笑みを意味アリに受け取ったよう。私は奏が持っている報酬を物色していた。うん、今日も食べ物と飲み物はいっぱいだ。

「今日のギルドはとんでもないものだ」

「とんでもないって何よ」

君たちには出来ないことだ、とホワイトボードに書いている店主を見ていないです。はい。

「異世界、ナリセッタに行ってもらう」

君たちなら必ず出来る！　だから行ってくれ！　と小さなホワイトボードに書いている店主なんて見えてないです。決して。しかもなんで大きさを変えた？

「異世界？ 突然どうされたのですか？ 私めは今、おにぎりを頬張っているのです。そのような訳のわからないことを言ったらおかず投げるよ？ ちなみにカニ味噌なんですよ」
そういうことじゃない！ ホントにナリセツタはあるんだ！ 行ってくれ！ お願ひ、まだは小さなホワイトボードに書いている店主なんて見えていませんよ？ しかもホワイトボードに入りきってないし。続きが書かれた。君たちを信じている！ 言ってくれよ！ 行くと！
と、ブラックボードにチョークで書きだしたし。いや、もう発言すればいいじゃん。
「え？ カニ味噌？ 美味しそうだね。じゃあ、今日のところは帰ろっか」
奏はサクツと無視を決め込んだ。そうしたいが店員の笑みと怒りを見てはいけな。顔が凄いことになっている店員は私を見る。

「行かなければ店員権限で報酬を全て没収させてもらう！」

「この店の権限配布はおかしいよ！ そしてもう全て食べて飲んでしまったから、ない！」

そ、そんなバカなあ……、と頷れる店員さんにカニ味噌を投げた。カニ味噌を取って食べたのが面白かった。うめえ、とこぼした店員さんでした。

「そのバッグには……何があるんだい？」

ん？ と振り返ると、店主が腕を組んでいた。帰らせないのかしら、と思つて背後を見ると大雨だった。

「やばいな。ホント。こんなにも運が悪いだなんて」

「そんなに異世界に行きたくないのか？」

「いや、雨ですよ」

「儂が降らせた」

「あんた、雨乞いの術を？」

「当たり前だ。この儂に不可能なことなどないのだから」

「じゃあ、私達にナリセツタに行かせることは無理だったね」

「不可能という言葉の真の意味を知っているか？」

「唐突ですね。無理とか、できないとか？」

「はっはっは。なら儂の勝利だな。不可能とは出来るということまで物事を追求するときの目標だ」

「あんたの事情なんて知らん」

「ということはだな、ナリセツタに行かなければ雨を降らせてこの店に閉じ込めることなど今のわたしには造作もないことだよ」

「説明乙」

「はい。じゃあ、行くのかね？」

この室内でクスクス笑うお客さんがある。私も笑いたいが、とにかく、雨に困ってしまった。雨乞いとかどれだけ古い人の考えなんだ。

「行きません。話も聞きません。そしてこの雨の中をどうやって帰るのかを考えているので黙ってください」

「なっ！ その手段があつたか！ ならば！」

店主さん。手を振りかざしても何も起きませんよ？

雷が鳴り始めた。強風が店を揺らしているほど吹いている。そんな天気急に変わったよ。

「いや、しかしまあ、こんな運の悪い日なんてないんじゃないかな？」

「奏？」

「別に異世界に行こうが、行かなかろうが、僕の肚は決まっているけどね」

「というのは？」

「もう、異世界に来てるってこと。行つてらっしゃい」

「え？ え？」

悪天候の全てがぴたと止んだ。そして恐る恐る店の入り口を開いた。

前に進んでいる、と私の感覚が伝えてくる。星屑が煌めき始め夜色に染まりだした。ただ暗い道をゆつくりと歩く。

なぜ、異世界に来てしまったのかがわからない。戻ろうとしても背後はなく、同じ景色が続いている。でも、上空は星が綺麗に輝いていた。色も消えていき、ゆつたりと雲は流れていく。

星に届けと樹々が立ち並んでいた。真っ直ぐにただ上に伸びている。暗くても樹々が見えているが仕方ない。私はゆっくりと流れる雲を見つめる。

「はあ、奏もないし、あの店主には笑われるし。どうしましょ」

頭のイメージは『ああ、これからも』の看板だけだ。そのイメージがここに置かれてほしいと心の奥底から思ってしまう。

「店主が怒ったのかなあ？ でも、あれは笑いをとるためにしていたとしか思いようがなかったんだけどな」

いや、ホントに。そんなことをぶつぶつ呟いていると、飛行機が飛んでいた。

「え？ 飛行機？」

めちやくちや低空飛行か？ と思っていると、ここが、かなり上がっている。そんな場所だとようやく理解した。

「空を飛んでいる？ という事実しか導けないよ。てことは」

その場で跳ねてみると、樹々よりも上になった。もう、わけわかんないです、はい。

「ここはどこよ、ホント」

「選ばれしものが来たの？ どこお？ うーん、こちら辺から声は聞こえたんだけどな」

ん？ と、飛行機の近くに「在者」がいた。在者は飛行機の横に書かれていた。文字が紅く目立つように輝いていた。そして、在者を自然に理解できた私は何なのだ？

「あのお」

ようやく帰れるのか、それとも、想像の中にいるのか。その答えを求めて在者に尋ねた。

「ああ！ 貴女が新しい在者かしら？ 創造主からは何か聞いているかしら」

もつと意味不明になったと愚痴つても仕方ないだろうともう割り切るしかできない私を赦してくださいそしてこれからのことも絶望になつて私のことを今まで以上に誇り高く想い様がな
い奇跡を信じるまでいつまでも私は星屑となつた日に帰りましょう！

つまり、それぐらいもう、嫌なんですよ。

「……はあ。どうしょ？」

「どうしたの？ 他に誰もいないんでしょ？」

「いませんよ。いや、ね。お店から来させられたんですよ」

「どこの？」

尋ねている瞳が非常に期待していた。いや、ご期待に添えられませんよ？

「店名長いんで、略しますけど、『ああ、これからも』ですよ？」

「やっぱりだ！ やったあ！」

もう、どうすればいいのでしょうか？

「つまり、貴女は普通の世界へと、帰りたいのですね？」

「はい……。せっかく在者に出会えたんだから少しは帰れる期待をするのも普通でしょうに」

「そうです、この世界はナリセッタ。そして貴女の謎を解き明かすことしか出来ないとしたか、言いようがないのですよ」

「謎？ さつきも聞きましたけど」

「そうです、謎です。ナリセッタにやって来るということは必ず在者になり、理由を求めるのです」

「それ、さつきも聞きましたけど、何で理由が必要なんですか？」

「理由があれば創造主様の身許を離れられるのです。そして自由でも理想でも、何でもいいんです。その望みが叶えられるのです」

「じゃあ、私の場合は本来の世界へと帰るために理由を求めよ、と」

「そうです！ という、私はこのナリセッタに残ることを求めたので。だから、貴女の帰るまでを支えますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「こちらこそです。それでは、飛行機に乗ってくださいますか？」

「その前に、ここの空間は何なんですか？ なんか、何もありませんけど」

「この空間は煉国ですね。煉獄に近いんですけど、ナリセッタに入ったばかりの人に様々なことを教える場所ですね。私の仕事でもあるのですが、説明については」

「はあ……。一生ここにいるのかと思いましたよ。でも、跳んだりしたら、なんか昇りましたけど」

「危ないことしますね。それをしたら、堕ちたらどうするんですか」

「堕ちる？」

「在者としての誇りなどが壊れるということですよ。初めからステータスダウンして始まるゲームみたいなものですよ」

「その例えが通用するってことはゲームあるんですか？」

「ほら、あれ」

在者が飛行機の背後を指差した。液晶画面に様々な情報らしきものが流れていた。一部に、止まっている映像もあった。

「あの止まっている映像が私のささやかな楽しみのレーションというゲームですよ。今、結構なレベルになって魔王も倒せそうなんですよ」

「そうですか」

「なんですか、その棒読みは。まあ、乗ってください」

「はい」

私は搭乗口に立って俯瞰した。うん、何もない。樹だけ。

「どうしました？」

「あ、いえ」

気のせいだろう、なぜ、機が在るのかは。

「そういえば、名前お互い名乗ってませんね」

「そうでしたね。私はキサラギサキです」

「私は、クリメです。よろしくです」

「よろしく」

そして搭乗口がゆつくりと閉まっていった。飛行機はゆつくりと次元を超えて行った。

「えー、右手に見えるは、おじさんです」

「まるで、バスの運転手みたいな言い方やめて。ちよつと気持ち悪いよ」

「サキは文句を言うのね。そんな子に育てた覚えはないのに……」

「私も、バスの運転手が飛行機を飛ばしている事実を確認したかっただけなのに」

「そうね……、やつぱり密室トリックは飛行機が一番ね」

「同感だわ。吟遊詩人を知っている人こそ、ヘルメス文書に近づけるといいうことを教えてあげたいわ」

「そつか、そうだよね！ ビールにさやえんどうはとても、くだらないよね」

無言。沈黙。笑み。そして。

「ちよつと！ クリメ！ ツツコンでくれないと！ 私が馬鹿みたいじゃない！」

「そういうサキもでしょ！ どっちもボケつていう漫才師なんていないわよ！」

そして大爆笑でゴザイマス。

ただいま、飛行機は次元を超えた。そして城下街を見下げる形で飛んでいる。大自然が雲に突き刺さるまで高いのだ。悠然と佇むというのはこの様な時に使うのではないのか？ と思つてしまった。

大自然が白い雲を幾つも突き刺す。ロック鳥は悠然と仲間と飛んでいる。陽射しが佇んでいる大自然を照らしていた。

星屑が轟音と共に落ちてくる。だが、大海にリヴァイアサンが暴れまわっていた。リヴァイアサンを叩き潰す勢いで落ちていく。

暫くして大海に静けさが取り戻された。負傷したりヴァイアサンは在者の狩りに利用されていた。そして気付く。星屑は在者が術で落としたのだと。

「下の景色、とにかく凄いんだけど」

「そうだね。地球なんて場所じゃあんな景色を見せろと言ったところで無理だろうし」

「うん、凄すぎた」

「それで、どこに住みたい？」

「どこ？ 街じゃないの？」

「住民登録は現段階じゃ無理ぽんです」

「じゃあ、自然の中でチーですか」

「それが良いかもしれないカンかな？」

「終わりだな、ロン」

「麻雀なんてしてません。私が紅孔雀を揃えるほどありません」

「紅孔雀知っていたらちよつとは知ってるねえ、となると思うが、数え役満なんで、街に近いところをお願いします」

「はいよう！」

飛行機は下降していき城下街から離れていく。城下街近くにある、住宅街らしき場所を通過し、自然へ。

自然に包まれている集落と言ったところか。集落にとつてあまりにも大きい飛行機が到着する。そして轟音に振り向いた村民は手を振っていた。……クリメは人気者と言ったところか。

「到着。さて、私はここからゆつくりと落ちていくのであろう！」

「いや、待て。落ちていくのであろう、というか、なぜにこんな地方に来たの？」

「私の住処であり、故郷でもあるからね。仕事が終わったあとはここでいつものんびりしているのよ」

「へえ」

クリメは人気者ですぐに笑つてみせた。こんな明るいところがあるから私より尊敬される。なんとなく、そんなことを少しばかり思った。飛行機が無事着陸し、私とクリメは降りた。

「みんなあ！ お久しぶりい！ この人が新しい在者だよ！」

おお！ そうなのか！ 新しい人は大歓迎！ 古い人も歓迎しているのよ！ 私の傘はどこへブンズストア！ 古紙回収万歳！

と、様々な声が聞こえたが、後半に至つては無視です。

「ここはどこなんでしょうねえ」

眩かざるを得ないが私は空を見上げる。陽かりは相変わらずお星さまに陰っている。星屑が垂れ流されてゆつくりと空を靡いていた。

「ねえ、サキ。とりあえず、城下街行つてみる？」

「うーん。今は休みたい。ずつとあの空間にいたせいで目と身体が酔っているから」

「あ、そっか。そうだね。あんな場所にいたら色々とおかしくなるからね。そりやそうだ」
うんうん、とクリメはからから笑つた。私も思わずつられて笑つた。二人で笑っていると誰かが傍に来た。

「ねえ、おねえさん！ いっしょにあそぼ！」

「こら！ ナギ！ ダメよ。この人はまだ終わっていないのよ？」

「あ、そっかあ。おねえさん！ おわつたらあそぼうね？」

え？ とクリメが懐かしそうに見ていた。私を見つけて嬉しそうな、そんな表情で。

「あの子も、また始まるかもしれないって思っているのよ」

「なにが？」

さっぱりなんですけど、と声に出すと、クリメが言う。

「サキがまだ、幼い頃に誰かが居たってことなの」

「はあ」

やはり、異世界に飛ばされたのには理由があるということだろうか。そう思うしかない、今は考えるしかなかった。

「はあ、やつぱり、いないな」

暁が消えてしまった。僕はどうすればいいのでしょうか？ 答えは至ってシンプルであるが仕方なし。

「『ああ、これからも』から遊びに行く様に見えたのは気のせいだったのかな。もう、このお店は畳まれてるし」

『ああ、これからも』は移転して、大きなテナントに移った。僕は貰った報酬を持っているだけ。仕方なしと、家路を辿るしかなさそうだった。

「あれ？ お兄さん？」

と、とぼとぼ、歩いていると僕を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、妹が笑顔でいた。

「おお、恋花。ネームプレートがひらがななんだな」

「うん、だって保母さんが漢字だったらお子様は読めないでしょ？　で、お兄さん、どうしたの？」

「どうしたも、恋花の家に行こうとしたところだよ。ルームシェアの人が突然失踪したんでね。どこに行っただかねえとか思いながら落胆していたんだよ」

「あら、それは大変ね。まあ、そんなときもあるんじゃない？」

「いつものことだったらいんだけど」

「いつものこと？」

「突然、咲はとんでもないこと言うし」

「たとえば？　私を愛してくれ、とか、あんたなんて大嫌い！　なんて嘘だもん、とか、私は貴女のマスターです、とか？」

「妹君よ、貴様は僕をバカにしているのか？」

「そんなそんな。ただただ、私は人を大切にしない人なんてだいつきらい！　って主張したいんです」

「今の会話にそんな要素がどこにあった」

「端々に感じない？　人は神に成るために人生というものを歩いていくということをして！」

「帰りたくないですね、はい」

「ええー。そんなこと言わないで。洗濯罪と遊園地のチケットあげるから」

「いま、なんといった？」

「洗濯罪」

「それ漢字で書いたらどうなる？」

「ここは国事じゃない！」

「何が言いたい！」

そこまでよ！ と遠いところから聞こえた気がした。遠いんじや結構説得力に欠けるなあと思つても仕方がないのかな？

「何か聞こえなかったか？ 妹君よ」

「聞こえなかったね。さあ、帰ろっか」

「そうだな」

ちよつと！ 私の存在を忘れないで！ 私は貴方達に使命があることを伝えに来たのよ！と、ちよつと近いところから聞こえた気がした。少しずつ近づいているおばさんがキモい。

「でも、恋花のご飯なんぞ、食べる人はいるんかね」

「いや、お兄さん。アニメの真似しないで」

「アニメ？ 最近、なんかおもろいもんはあつたんかね？」

「あまりなかったですね」

「そこまですよ！」

目の前まで走ってきた、荒い息をついているおばさんがキモかった。いや、服とかじゃなくてなんか、色々と。

「うざい」

「消えろ」

「ちよつと、なんで私の意見を無視するの？」

「お前が僕たちのことをバカにしたからです。それ以外に理由なんて存在しない！」

「そんなざいしない！」

「知らん！」

おばさんとはにかく、荒い息を続ける。キモい。来るな。

「貴様なんて瓦礫の底にでも埋まっているがいい！」

「いいい！」

「そんなことを言うな！ あんたらにとても、くだらないことを言わなければいけないのよ！」

「くだらないのは貴様だ！ 所詮星屑でも数えるんだろう？」

「だろう？」

「いや、違う」

「そこはシリアスになるパターンではない！　だから、黄金席でも持つとけ！」
「とけ！」

「女の子の方が結構気になるのですが。あと、私、神だし」

「還るか、妹君よ」

「そうだね」

頭がおかしい人だとは聞いていたがここまでとは。やはりゆとり教育は弊害が多いのだ。おばさんもきつと苦労したんだろう。

空を見上げれば、星屑が煌めいていた。赤も紅も朱も翠も。宝石箱の中身をばら撒いた輝きは、綺麗だった。林道に差し掛かった先は言葉に尽くせない。美麗だからだ。

「でも、森の中の小屋はいつも誰が掃除しているんだろう」

「妹君？」

「最近行くんだけど、管理人がいるかもしれないんだよねえ。私達が使いたいかもしれない」
「そうなのか。初めて知ったよ。いてもおかしくないかもな」

最早、神と自称したおばさんは黙っていた。憤怒と諦観が混ざった不思議な表情だった。ボキヤブラリーに貧困な神っているんだな。そんなことを思った。

「私、良いこと思いついた！」

「なんだい？」

両手を腰に当てて、不敵な笑みを浮かべている。そして自称神に指さした妹君だった。だか
「おぼん！ おぼん！ 貴様が森の中に潜んでいたことは違う並行世界から見ていた！
ら、貴様が管理人になったという設定にして、貴様を働かせやる！」

何回、貴様を言えば気が済む、と思ったが知らぬは存ぜぬ。ということにしておこう。
そして目がキラキラ輝いているのは誰だと思う？ そう！

「……うふふ。……うふふ」

おばさんでした。

そうだとおもったよ。

でも、だいじょうぶ。

わたしがいれば、どんなささいなことでも、まもってあげられる。

だから、いっしょにいて。

むずかしいことばだけど、とこしえていうんだって。

だけど、はずかしいね。

ずっといっしょにいることって。

でも、へいきだからね？

ずっと、いっしょ！

在者に様々な質問をされる。部屋に入っていきなり言われる。そしてご飯の度に言われる。疲れました、はい。

「あのさ、クリメ」

「ぼぼうびぼぼ？」

「とりあえず、飲み込んでから言ってください」

クリメがスプーンで炒飯を食べ始めていた。飲み込むスピードまでが色々と凄かった。なんというか、大食いチャンピオンってこんな感じなのかなあ、とか思いました、はい。

「飲み込んだよ。それで？」

「在者って子供も大人も中年も老人も一括り？」

「Yes! My master!」

「何故に外国語？」

「いや、その『ああ、これから』の店に行ったときがあつてね。そこに通っていた外国人に習った」

「は？ あの店知ってんの？」

「異世界の入り口ですからね。そりやそうでしょ」

「そうなの!? というか、普通に炒飯食ってるシーンがあまりにも不自然過ぎたつてのは間違

いではなかったのですね」

「説明文乙」

「すいません」

そして、また炒飯に手をつけた。クリメがお気に入りの料理って外国が基本？ と問いたかった。が、この世界を理解する必要がある。だから、ゆっくりと様子を見よう。

部屋の内装が華美なのは気のせいかな。鮮血の紅さに染まった絨毯が広がる。壁は蠱惑的な感傷を抱かせる。壁と同じ色の天井だった。天井から吊られている燈火が明々と光っている。燈火にも一工夫されていることに気付き、感心した。ほんの少しだけぽつぽつと穴が空いていた。星をイメージしているのだろうか。そのおかげで紅い空のプラネタリウムを想起した。

「さて、クリメ君よ」

「なんでほあいましょう」

「とりあえず、食べなさい」

「じゃあ、呼ばないで」

「何でもまともに喋れるの？」

「ほ、ほんほはひほほはひ！」

「頬つねるよ？」

「痛いです。言ってからメリケンサックらしきもので殴らないでください」

「やだなあ、これは頬をつねる道具だよ？」

「そんなことを邪悪なる笑みで言わないで！」

「うふふ」

「逃げろ！」

そして皿にご飯を乗せて逃走されました。いや、待て。壁の背中にスプーンを押し込んだ。
なにしてんの？ この人。

「何してんの？」

「怖い人には言えません！ いやあ！ 私はまだ産まれたくない……」

「どういう状況なの。あなたの頭は」

「だって、怖いもん」

「怖いイコール産まれるって何」

「だって、皿を見たもん」

「見たら、なんで以下同文」

「だって、以下略」

……不毛な会話とはこういうことなのでしょう。王様に聞きたいです、はい。

「さて、そんな冗談は終わって」

「とりあえず、その狂気仕舞って」

「いや待て。そんな危ないものは持っていない」

「そうじゃなくて、殺氣らしきものをびんびんに感じますけど」

「さつき？ なにかしたつけ」

「ふざけないでよ！」

「お前の真似じゃあ！」

そして、猪突猛進だ！ そして、抱き締めた！

「可愛いねえ、クリメは！」

「ああ、まるでお母様の様な抱かれ心地だわあ……、離れろ！ キモいレズビアン！」

「だって、恋する乙女って女性から狙うって知らない？」

「何の話だ！ 離れろ！」

「はいはい。あなたには冗談は聞かないのね」

「はあ、色々今回の事件で学んだよ」

「なにを？」

「在者はセクハラされても仕方ないと」

「ふうん。よくわからない」

「わからなくてもいいよ」

と、お互いが向き合って椅子に座る。今更だが、軋んでいるのは気のせいかな？

「でも、どうして、そんなにも、苦しい思いをしてるの？」

「クリメ？」

「なんか、孤独感的なものない？ サキには」

はあ、と溜め息をつき肘を立てる。テーブルがまた軋んだのは気のせいかな？

「なんかさ。私の恋人が私に好きってアピールしてくれているのは気付いてるの。それに対する解答も用意してある」

「そうなんだ。私？」

「違うわ！ カナデよ」

「今の恋人さんなんだ。じゃあ、言ったらいいのに。因みに解答って？」

「『私を幸せにすることが出来るのは貴方だけ。でも、貴方を幸せにすることができない。そんな私を許してくれるんなら結婚しても良いよ？』かな？ こんな感じ」

「なんか、疑問符が考えられる答だね。なんで、幸せにできないの？」

また、椅子が傾いで軋んだ音が聞こえた。

「『幸せにすることができないのは、一つだけ。貴方が忘れていることがあるから』ですよ」「忘れてる？」

「うん」

もう、軋む音がゆっくりと消えていった。魔法で直ったのかな？

「なんか、色々と意味深なこと言ってるじゃん？　これが伝わったらとか思わないんだ」

「だつてねえ……。こんなこと真向いで言える？　恥ずかしくて恥ずかしくて仕方ないでしょ。それに」

「それに？」

「もう、忘れていることを思い出すことが出来ないんだろうな、って思ってるし」

「わかんないじゃね？　でも、なんとなくはわかったけど」

「けど？」

「ナリセツタの王国に行こう、とは思わないの？　そんな恋人捨てて、私が恋人になるんだい！」

「キモい。臭い。そしてなんか嫌だ」

「色々と酷いのでやめてね！」

「はあい！　今日は寝よう！」

ホントに自分勝手な人だな、と呟いたクリメが気になった。だが、眠気は抗いようもない程の勢いで襲ってくる。

「また明日があるといいね」

そんな言葉もどこか遠い場所から聞こえた。そんな気がした。

「あれ？」

「どうした？　咲」

「栗目は？」

「くりめ？　そんな目の色してないぞ？」

「あ、いや。私、『ああ、これから』から異世界に行かなかったつけ？」

「行っただけ。……ああ、なるほど。帰って来たってこと知らなかったんだな」

「知らなかったって、奏は知ってたの？」

「知ってた。だから、咲が帰ってくることを珈琲でも飲んで待つてたよ」

店主！　と目の前にいる奏が呼んでいた。その隣に奏の妹、恋花ちゃんが座っていた。

その間に恋花ちゃんが「ICレコーダー」をテーブルに置いた。栗目が特徴的だったな、と恋花ちゃんを見て思い出す。

「おやおや、ここに帰ってくるということは、またテナントを戻さないといけないではないか」

「いや、それはいいんだけど、時間、どれくらいかかりました？」

「まだ三時間程度か？」

「それだけです。また来るんで」

恋花ちゃんが私に目配せをする。「ICレコーダーを取れ」辺りだろうから、奏に見られない瞬間に取った。

「じゃあ、また、ギルドお願いしまーす」

「ああ。しかしまあ、店主って変なおばさんが妻だつてことは知りませんでしたよ」

「お兄ちゃん、行こー！」

「おう。それで、咲。今日はお土産があるんだが」

「そうなの？」

「テナントが変わつてる間にギルドの報酬として色々貰つたんだよ。そんなに咲が喜ぶものがあつただけど、どうしたかな」

二人がお礼を言つて『ああ、これからも』から出た。そして奏は紙袋の中身を漁り始めた。今日も晴天だ。その間に恋花ちゃんが意味深な栗目で言う。

「家に帰つて聴いてね！」

「え？ あ、うん」

「お兄ちゃん！ 今日私の為にご馳走でしょ！ だから、早くして」

あれ？ ないなあ？ どうしてだ？ と言っている奏だった。何を探しているんだろう。

「まあいつか。じゃあ、家に帰つてまた探そう。すまん、咲。今日はずっと寝てないんだ。だから、帰るしかないかも」

「いいよ。でも、ここはどこなの？」

「なんか、ぎりぎり市域な場所だから電車使つてなら帰れるから。ほい、お駄賃」

「あ、ありがとう」

二人と駅で別れた。何かあったのかな？

「さて」

意味深に残された、『レコーダーを思い出す。ポケットから出して、イヤホンをつけるタイプらしいので差し込む。』

「何が記録されているんだろ」

イヤホンを耳に突き差して、待つ。そして聴こえ始めた。

『可愛いねえ、クリメは！』

『ああ、まるでお母様の様な抱かれ心地だわあ……、離れろ！ キモいレズビアン！』

『だって、恋する乙女って女性から狙うって知らない？』

『何の話だ！ 離れろ！』

『はいはい。あなたには冗談は聞かないのね』

『はあ、色々今回の事件で学んだよ』

『なにを？』

『在者はセクハラされても仕方ないと』

『ふうん。よくわからない』

『わからなくてもいいよ』

『でも、どうして、そんなにも、苦しい思いをしてるの？』

『クリメ？』

『なんか、孤独感的なものない？ サキには』

『なんかさ。私の恋人が私に好きってアピールしてくれているのには気付いてるの。それに対する解答も用意してある』

『そうなんだ。私？』

『違うわ！ カナデよ』

『今の恋人さんなんだ。じゃあ、言ったらいいのに。因みに解答って？』

『私を幸せにすることが出来るのは貴方だけ。でも、貴方を幸せにすることができない。そんな私を許してくれるんなら結婚しても良いよ？』かな？ こんな感じ』

『なんか、疑問符が考えられる答だね。なんで、幸せにできないの？』

『幸せにすることができないのは、一つだけ。貴方が忘れていることがあるから』ですよ』

『忘れてる？』

『うん』

「これ……。ナリセツタに行つたときの記録……。？　いつ？」

そして気付く。あのときに何度も軋んでいたはずの軋み音が聴こえない。

「軋んでいるのはこの記録を付けていたからなんだ……。あれ？　じゃあ、私にしか聞こえていなかったってこと？」

そう考えると、じゃあ、なんで異世界なんてものを見たの？　よく考えてみたら軋む音が聴こえていた私が見ていたものは全て、

「映像か、何か？」

そして、続きがあることに気付いた。一旦、考えを止めて、続きを聴く。

『ああ、お嬢ちゃん。森までごめんねえ』

『良いんですよ。平行世界とか言ったらバレるかな？　とか思ってたけど、やっぱりバカだから、お兄ちゃん』

『それで？　この「レコーダー」を使って、気持ちを伝えるのかい？』

『うん、二人は幸せになれると思うし、それに、咲さんも好きってこと、異世界と思しき3D映画を見せて聞けるって思ったから』

『まあ、『ああ、これからも』はそういう場所だから。不思議な世界を提供するのはあの店の特権よ』

『でね？ これ、お兄ちゃんからは言ったらダメって言ってたんだけど、この「コレクター」に気持ちを残すのは伝えないとなつて』

『そうだね。そうかもしれないね。言葉は？』

『そうだとおもつたよ。』

でも、だいじようぶ。

わたしがいれば、どんなささいなことでも、まもつてあげられる。

だから、いっしょにいて。

むずかしいことばだけど、とこしえつていうんだつて。

だけど、はずかしいね。

ずつといっしょにいることつて。

でも、へいきだからね？

ずつと、いっしょ！』

『幼い頃に、三人で言つた言葉なんだ』

続きを止めた。私は思わず破顔する。

「ははっ！ なーんだ！ 忘れていたのは、私だったんだ」

全てのもやもやが解決された。そして私があの店に行く理由がわかった。だって、店名からわかっていたことなのに、今気付くなんて。でも、これから、あの二人と付き合うのが楽しみになってきた。

「家でのんびりと続きを聴こうかな。ありがとうね、恋する花畑ちゃん」

電車がやって来た。私はイヤホンと「コレクター」を片付けて、のんびりと電車からの風圧を感じる。

思い出す。また、くだらないことで言い合おう。

例えば、イタリアン料理か、フランス料理とか。

例えば、意味わからない会話とか。

例えば――。